**おおさかＱネット[手話に関する府民の意識等」に関するアンケート**

**分析結果概要**

■実施期間　平成29年9月22日（金）～9月26日（火）

■サンプル数　国勢調査結果（平成27年）に基づく性・年代・居住地（4地域）の割合で割り付けた18歳以上の大阪府民1,000サンプル



大阪市域　　：大阪市

北部大阪地域：豊中市、池田市、吹田市、高槻市、茨木市、箕面市、摂津市、島本町、豊能町、能勢町

東部大阪地域：守口市、枚方市、八尾市、寝屋川市、大東市、柏原市、門真市、東大阪市、四條畷市、交野市

南部大阪地域：堺市、岸和田市、泉大津市、貝塚市、泉佐野市、富田林市、河内長野市、松原市、和泉市、羽曳野市、高石市、藤井寺市、泉南市、大阪狭山市、阪南市、忠岡町、熊取町、田尻町、岬町、太子町、河南町、千早赤阪村

**1.　調査目的**

　手話は、障害者基本法において「言語」と明確に規定されているにもかかわらず、そのことの認識が普及せず、そのために手話を習得することのできる機会が確保されていない。このような状況を踏まえ、「言語としての手話の認識」や、聴覚に障がいのある方々等の「手話の習得の機会の確保」を目的とし、「大阪府言語としての手話の認識の普及及び習得の機会の確保に関する条例」、いわゆる「手話言語条例」を平成29年3月29日に施行し、約６か月経過した。言語としての認識をはじめ、手話に関する関心や学習意欲などを調査し、今後の施策の展開の資料とする。

**2.　主な調査（検証）項目**

仮説１　性年代や手話の学習経験によって、手話が言語であることの認識に差がある。

仮説２　性年代や、手話が言語であることの認識によって、学習意欲に差がある。

**3.　主な調査（検証）結果**

仮説１　手話が言語であることの認識

* 男性に比べ女性の方が、手話が言語であることを知っている人の割合が高かった。
* 手話を学んだことがある人は、学んだことがない人に比べ、手話が言語であることを知っている人の割合が高かった。

仮説２　今後の手話の学習意欲（これまで学習経験のない人）

* 男性に比べ女性の方が、学習意欲が高かった。
* 手話が言語であることを知っている人の方が、そうでない人に比べ、学習意欲が高かった。

（注）

1.　「おおさかＱネット」の回答者は、民間調査会社に登録するインターネットモニターであり、回答者の構成は無作為抽出サンプルのように「府民全体の縮図」ではない。そのため、アンケート調査の「単純集計（参考）」は、無作為抽出による世論調査のように「調査時点での府民全体の状況」を示すものではなく、あくまで本アンケートの回答者の回答状況にとどまる。ただし、性別、年齢、地域に関しては、直近の国勢調査の大阪府の構成比に合わせている。

2.　割合を百分率で表示する場合は、小数点第2位を四捨五入した。四捨五入の結果、個々の比率の合計と全体を示す数値とが一致しないことがある。

3.　図表中の表記の語句は、短縮・簡略化している場合がある。

4.　図表中の上段の数値は人数（n）、下段の数値は割合（％）を示す。

5.　図表下にカイ2乗検定の値（p値）を記載しているものは、信頼度5％水準で統計上の有意差がみられたもの。

6.　複数回答のクロス集計については、カイ2乗検定を行っていない。

1. **手話が言語であることの認知**

平成29年3月の大阪府手話言語条例の施行以降、府において、パブリシティ活動や府政だより・ＳＮＳによる発信など、手話が言語であることの普及に取り組んできた。そこで、施行から約半年経過した９月末現在における本アンケート回答者の、言語としての手話の認識や手話習得に関する意識について検証した。

また、検証にあたっては、手話が音声言語と同じように「言語（ことば）」であることについて、「よく知っていた」と「何となく知っていた」を【認知層】とし、「知らなかった」を【非認知層】とした。

1. **全体結果**
* **「手話が言語である」ことの【認知層】は５６．４％であった(図表1-1)。**

**【図表1-1】**





(参考)平成２８年８月実施アンケート　「知っていた」・・・３９．８％



1. **性年代別（図表1-2）**
* **性別では女性の方が、男性に比べ【認知層】の割合が高かった。**
* **年代別では、60代以上が40代に比べ【認知層】の割合が高かった。**

**【図表1-2】**





1. **学習経験別**
* **手話について、学習経験がある人（予定を含む）とない人ではある人の方が【認知層】の割合が高かった（図表1-3）**

**【図表1-3】**





1. **手話の学習意欲（これまで手話を学んだことがない人）**

手話に関心はないわけではないものの、これまで手話を学んだ経験のない人※の、今後の手話の学習意欲について、手話が言語であることの認知の有無や、性年代で差があるのかを検証した。

検証にあたっては、「今後手話を学んでみたいか」という質問に対して、「ぜひ学びたい」「できれば（機会があれば）学びたい」と回答した人を【学習意欲あり】、「あまり学びたいと思わない」「学びたくない」と回答した人を【学習意欲なし】とし、「わからない」は除いて集計した。

※手話について関心があるかという質問に対し、「どちらかというと関心がない」「全く関心がない」と回答した人を除いた人（「非常に関心がある」「どちらかといえば関心がある」「どちらともいえない」）のうち、これまで手話について学んだことがない人。

1. **性年代別（図表2-1）**
* **性別では、男性に比べ、女性の方が学習意欲が高かった。**
* **年代別では、若い年代の方が高い傾向はあるものの、統計的に有意といえる差は確認できなかった。**

**【図表2-1】**





1. **手話が言語であることの認知別**
* **手話が言語であることについての認知層の方が、非認知層に比べ、学習意欲が高かった（図表2-2）。**

**【図表2-2】**





以上のように、手話が言語であることの認知と、手話の学習（経験や意欲）には関連性がみられた。言語としての手話の認識の普及によって手話を使用する人が増えるといった効果が期待できる。

1. **手話の習得について(参考)**

手話についての学習経験がある人と、今後学習意欲がある人に対して、どの程度のレベルの習得をめざしているか（いたか）について質問した。

検定はしていないが、性年代や、認知別に集計した特徴としては（図表3）、

・全体では、「日常会話程度」が44.6%で最も高く、次いで「自己紹介や挨拶ができる程度」が37.0%と続いた。

・年代では50代で「日常会話程度」が62.7％と他に比べ高かった。

・【非認知層】では、「わからない」が20.0%と他に比べ高かった。

【図表3】



